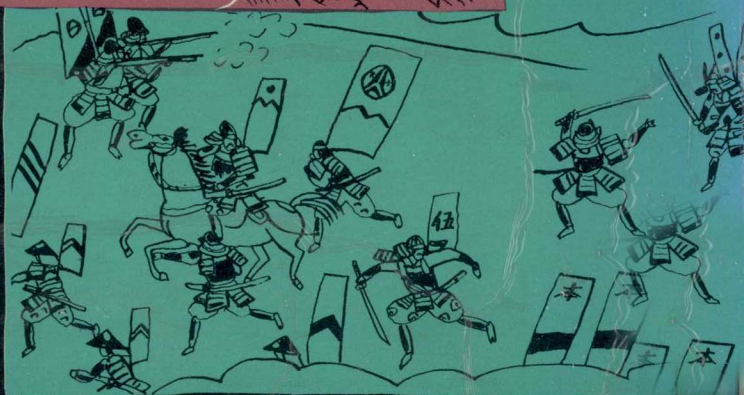
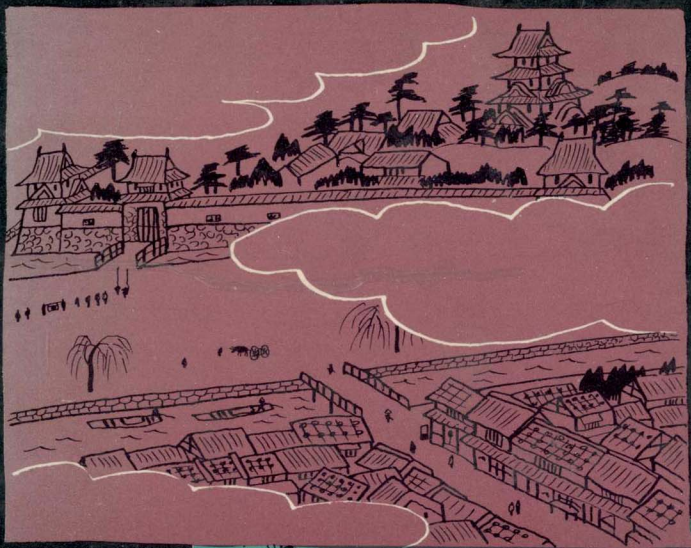
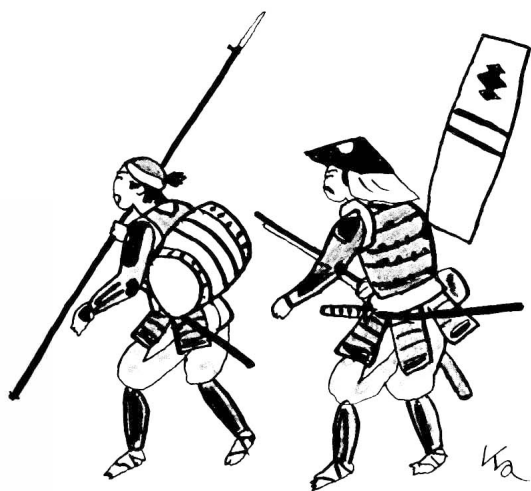


戦国と幕末

池波正太郎



池波正太郎 戦国と幕末



東京文芸社

戦国と幕末

八五〇円

昭和五十四年一月三十日発行

著作者 池波正太郎

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区大久保二六三

出張所 東京都新宿区弘方町一番地

振替・東京六一二七五七

電話・(三六〇)二五五〇

0093-793241-5170

無検印承認

戦国と幕末

関ヶ原と大坂落城

関ヶ原決戦と大坂落城 六

大坂落城——元和元年五月七日

信濃の武將と城 四二

秀家と昌幸と酒 五二

福島正則と酒 五六

忠臣蔵と堀部安兵衛

元禄義挙について 六二

堀部安兵衛 七七

堀部安兵衛と酒 九一

柳沢吉保 九五

内藤新宿 一〇五

町奴と旗本奴 一二六

かたきうち 一三〇

新選組異聞

土方歳三 一四二

永倉新八 一四八

聞書・永倉新八 一五八

新選組史蹟を歩く 一六七

小栗上野介 一七九

伊庭八郎 二二七

真田幸貫 二二九

佐久間象山 二四六

会津藩の悲劇 二五五

陸奥宗光 二六六

装幀 風間 完

関ヶ原と大坂落城

関ヶ原決戦と大坂落城

一

世に天下分目といわれる関ヶ原の決戦を評して、
「あのようなものは、まこと武人の戦ではない」
と、いいきった男があった。

この男は、毛利勝永といい、当時、二十三歳の青年将校として関ヶ原戦役にも参加している。
勝永の父は、毛利壱岐守吉成（勝信ともいう）といって尾張出身の士だが、豊臣秀吉に目をかけられ、秀吉が病没したときには、豊前・小倉で六万石を領していた。

こういうわけであるから、むろん毛利勝永は石田三成を主将と仰ぐ「西軍」に与^よして関ヶ原へ出陣したのである。父を小倉へのこし、五百の手兵をひきい、勇みたつて出陣をした勝永なのだが、あの九月十五日の決戦には、戦場を眼前にしなが^ら、ついに敵の一兵とも戦う機会を得なかった。

奇怪なことではある。

いささかの気おくれも卑怯もなく、闘志満々の彼のような武将が、戦場をのぞみつ^つ、戦う機を失ったということ。さらに、戦火の中にいながらも、ついに戦わず、勝敗が決してから「退却」のため
に猛然と戦いはじめた西軍の豪将もいる。

関ヶ原戦は「ふせぐことを得た人物の急死によって起った」と語るものもある。

その戦火をふせぐことを得たろう人物というのは、故秀吉と共に、かつては織田信長につかえ、秀吉の信頼がふかった前田利家のことだ。

関ヶ原合戦の政治的背景については、別に他の執筆者によって記述されることであろうから、ここにはのべない。

慶長四年閏三月三日。

加賀大納言・前田利家が六十二歳をもって大坂屋敷に病死した。

利家は豊臣家・五大老の一人で、徳川家康より上席に在った。

死が近づくのを知って、前田利家は妻の松子の手をにぎりしめ、

「あと五年あれば……己のちからで諸大名をまとめてみよう。秀頼公を奉じ、一同寄りつどいて天下平穩の世を……」

くやしげにつぶやき、

「大仏も焼けた。狂え唯、遊べ唯、浮世は不定の身じゃまで……」

と、唄い出したそうなの。

この唄は、むかし、絶え間もない戦乱兵火を受けつづけてきた民衆たちの間に流行したもので、利家は自分亡きのちの世が、ふたたび戦火にみまわれることを予見したのであろう。

利家の死によって、徳川家康の「自分よりほかには天下をおさめるものはなし」との自信は、さらに強烈なものとなった。

少年のころから戦乱の真只中に巻きこまれ、あらゆる艱難をなめつくし徳川の家をまもりぬき、信長・秀吉の二大英雄に従い、忍従の長い年月を送ってきて、六十に近い年齢となっていた家康だが、非常の決意をかためると、五大老の一人、上杉景勝が領国へ引きあげていたのを、

「一度、もどって来るように」

と命じ、景勝がこれを拒否するや、断固として伏見を發し、江戸の本城へもどり、上杉討伐の軍をおこした。

これより先、徳川家康は、

「会津の上杉討伐は七月下旬である。諸將は急ぎ領国へ帰り、出陣の仕度をなすべし」

と、命を下したが、豊臣内閣の閣僚（中老、奉行など）は、これを懸命にとどめた。彼らは、家康が伏見を去れば、その間隙に反徳川勢力の結集がおこなわれ、それが戦火をよぶことを恐れに恐れた。

故太閤がおこした朝鮮戦争の辛忍を想うとき、諸大名たちの大半は、

「もう戦は困る」

平和を熱望している。そればかりではない。彼らは、もしも戦争となった場合、どちらに味方したらよいのか、その見込みも決意もつかぬため、戦うことを恐れたのであった。

だからこそ、家康は天下を取るための戦いのぞんだのである。長い朝鮮征伐にあたって、その団結と強兵をうたわれる徳川軍は留守居の番をうけたまわっている、ほとんど無傷であるばかりか、財力の消耗をまぬがれている。

ところで……。

のちに西軍旗上げの首謀者となる石田三成も、末東権太夫という侍臣を家康のもとへつかわし、こ

う申し入れている。

「それがしも御供いたしたい」

すると、家康は、鼻の先で笑い、
「三成殿は隠居中の身じゃゆえに、もしも出陣の意あるならば、子息隼人正に家臣をそえて差し出されよ」

と、こたえた。

六月六日。

大坂城内において、上杉征討における諸將の進路と部署がきめられた。

勅使が来て、討伐慰勞のためという名目で曝布をたまわる。こうなれば豊臣家でもだまっていられず、秀頼が家康をまねき、黄金二万兩と米二万石をあたえている。

これで家康は、秀頼にかわって叛徒を討つという天下に對しての名目を得たことになる。

「自分も御供をしたい」

などと、見えすいた外交辭令をおこなった石田三成にくらべて憎いほど見事な家康の仕様であつて、このときから早くも家康は戦争を始めているといつてよい。

家康は、伏見を去るにあたり、伏見城の留守居を命じた鳥居元忠に千八百余の兵をあたえたが、（これでは守りきれまい）

思い直して、内藤家長と松平家忠を伏見へ残そうとしたが、鳥居元忠は、

「このたびの東征は一大事ゆえ、殿には一兵なりとも多くひきいられて会津へおもむかれたし、こなたに兵火あがるときは、たとえ内藤、松平の兵を加えたとして、どちらにせよ伏見は孤立無援となりましよう。むだでござる、むだでござる」

なみなみでない決意をあらわし、かえって家康を強くはげましたという。

徳川家康は、七月二日に江戸城へもどり戦備をととのえ、総軍七万をもって七月十九日に江戸を發し、会津へ向かった。

石田三成も、かねて隱密裡に準備をおこなっていた挙兵計画を急テンポにすすめはじめた。

家康とちがひ、三成の場合は、豊臣家存続のために家康の息の根をとめてしまわねばならぬという故秀吉への忠誠と共に、

「豊臣閣僚の主体となって、思うままに自分の政治力を發揮してみたい」という野心がある。

この野心は天下をつかもう、天下人になろうというのではない。佐和山二十万石余の領主としてこころみた政治の実績を日本全土へおよぼしたいという意欲なのであって、事実、三成は佐和山の領主として当時の大名の中では傑出した政治をおこなっている。政治家としてはすぐれているが、戦将ではない。三成の戦歴はまずしい。秀吉の小田原攻めの折に、三成は武蔵の忍城を攻めて秀吉張りの水攻めをしかけたが物のみごとに失敗をしている。

武断派とよばれる加藤清正や福島正則など、秀吉子飼いの豪将たちにしてみれば、戦の下手な石田三成を総指揮官にいただくことなど、いくら豊臣家への忠誠という名目があっても、到底、なし得ることではない。かねて三成とは仲が悪かった清正や正則は別にしても、この一点において「西軍」に与した諸将たちの大半に「不安」が潜在していたし、まさに、その一点によって三成は敗れ、「西軍」は敗北することになるのである。

よき政治の中には理性がふくまれ、事務がふくまれ、理想が高揚されねばならぬ。これこそ石田三成そのものといってよい。

だが当時の戦争は、経験がつみ重ねた一種、動物的な「勘」の發揮であり、血生ぐさい戦陣において性格をも意見も違う多数の将兵を統轄すべき戦将としての威望が不可欠のものとなる。

いわゆる文治派の頭であった石田三成の潔癖な、それゆえに好き嫌いの念がつよく、よくいえば理性的な、悪くいえば懷疑的な性格がどちらに向いていたか、それはいうまでもなからう。

さて……。

三成は、中国に百二十万五千石の威容をはこぶ大老・毛利輝元を何とか説きふせて「西軍」の総帥に迎え、大坂城へはいってもらったが、輝元はむろん、みずから決戦の場へおもむこうというだけの

意欲はない。

家康に従って東下した諸大名の妻子は、それぞれの大坂屋敷にいたが、三成はこれを禁足せしめ、大坂に戒嚴令を施くと共に、徳川家康に対し、

「太閤の遺命にそむきし罪……」

をあげ、十三か条から成る弾劾書を發表した。

かくて、近畿・中国から大坂へ集結をした三十余將の「西軍」は、総勢九万四千余といわれる。西軍挙兵の報を、徳川家康は下野（栃木県）小山で受けとった。

二

家康の本陣が、小山に到着したのは、慶長五年（一六〇〇）七月二十四日であった。

当日。伏見城をまもる鳥居元忠が最後に發した使者が昼夜兼行で馳せつけて来、西軍の旗上げを報じたのである。

この報を受けるや、徳川家康は諸將を本陣へあつめて、

「皆々の妻子は、いずれも京坂にあつて、治部少輔（三成）は、これを人質として手中におさめたそうなる。宮津侍従（細川忠興）の内室（ガラシャ夫人）はこれを拒んで、わが屋敷に火を放ち、みごと自害をとげたそうじゃ」

いささかも隠すことなく告げ、

「そこもとたち、ひと先ず大坂へ帰られたらいかが!? 妻子の安全をはかるはそこもとたちの自由である」

思いきっていい、さらに、

「もしもその後、志あらば江戸へ参集されたし」

堂々たるものであったが、胸底には必死のおもいが秘められていたことはむろんである。

諸将みな、この家康の気魄にのまれてしまい、ことに豊臣恩顧の大名であり、武勇無双をうたわれた福島正則が、

「われは、内府（家康）と共に戦わん」

と叫んだので、たちまち諸将はこれに賛同し、反転して西軍にあたることを誓約した。これより家康の連合軍を「東軍」とよびたい。

家康はまた、

「この戦は、われが豊臣家の大老として、石田三成を討つものである」

との立場を強調することを忘れなかった。

ただちに、先鋒の福島・池田隊は小山を発し、強行軍をもって、早くも八月十日には尾張・熱田へ……さらに十一日に福島正則の居城、清州へはいって「東軍」の前線基地を確保してしまった。

これより先、七月晦日に、伏見城は「西軍」の手に落ちている。

この伏見城攻防戦の折、薩摩の太守・島津義弘は西軍に与していたが、すばやく密使を伏見城へ送り、

「かねて、内府公との約束もござるゆえ、これより城内へはいって共に城をまもりたし。門をひらきたまえ」

と、申し入れたが、島居元忠は、

「ありがたきことながら、われらも落城は覚悟のことゆえ」

拒否してしまった。

元忠にしても島津軍を信頼しきれなかったからであろう。

晦日の夜半、城内にこもる甲賀武士が西軍に内応し、突如、城内、松の丸へ放火して城外の西軍を

引き入れたため、激闘よく持ちこたえていた鳥居部隊も、ついに潰滅した。

こんな、はなしもある。

つい先ごろ、佐和山城の石田三成のもとでおこなわれた軍議に参列した長束正家（近江・水口城主）などは、西軍の諸将と共に東軍攻略の作戦をねりながら、一方ひそかに、密使を徳川家康の臣、永井右近大夫のもとへ走らせ、こう申し送った。

「いま、佐和山では徳川攻略の軍議がおこなわれていますが、この模様についても、追々申し送るつもりでござる」

ひどい男だが、それから二十日後の伏見城攻略には長束正家も参加し、松の丸を守備している甲賀武士たちの妻子らを近江から捕えて来て、

「もし寝返らなければ、おぬしたちの家族を磔刑はりつけにするぞ」

と、おどしたりしているのだ。

西軍の総帥におされた毛利輝元にしても、大坂へ出て来るや一族の長老、吉川広家が苦い顔をして、

「何で、かるがるしく出てまいられたのです。この事が家康公の耳にはいったら大へんなことになりますぞ」

と、たしなめ、すぐさま、黒田長政へ密使を走らせ、長政を通じて家康に異心なきことを誓ったりしている。

決戦場にのぞまんとする両軍の相違は、およそ、このようなものであった。

毛利や長束ばかりではない。

西軍に与せず大坂を去った後、西軍がもしも勝ったら馬鹿をみるし、そうかといって徳川にそむきたくないという大名、武将たちのいかに多かったことか……。

石田三成は、

「京坂を手中におさめた後、ただちに、こなたより出て行き、清州から名古屋のあたりまで進出し、引返して来る家康を迎え撃とう」

とのつもりであったが、東軍の先鋒があまりに早く清州へ引返して来たので、作戦計画は大いに狂った。

西軍は、伏見を落とした後、兵を三道にわけ、一は伊勢路を、一は美濃へ、一は北国を経略せんとした。

これに対し、取りあえず先鋒部隊を発せしめた家康の東軍は、徳川秀忠を主将とする三万八千の中山道軍を編成し、これを木曾路から美濃へ進出せしめ、家康自身は約四万の本軍をひきいて東海道を西上することになった。

秀忠の第二軍を信州で食いとめたのが、上田城にこもった真田昌幸・幸村の父子で、このため、ついに第二軍は関ヶ原決戦の当日に参戦することが出来ず、秀忠は父・家康から、非常な叱責をこうむることになる。

真田昌幸の長男、信幸は、前々からの徳川派で、家康の養女（本多忠勝の実子）を妻にしていたこともあり、父と弟を敵にまわし、東軍へ与したはなしは、よく知られている。

ところで……

江戸へもどった徳川家康は、一か月近くもうごかなかった。清州に集結を終えた東軍が、総大将の到着をいらいらしながら待っていると、家康の使者、村越直吉がやって来て、

「御一同には、すみやかに開戦せられよ。そのはたらきによって向背の決心をしめされたなら、殿もただちに御出馬なされよう」

と、いう。東海道をのぼる東軍の大半は豊臣恩顧の臣であるから、先ず、その戦ぶりを見きわめな